



「クリニック森の風」正面入り口。煉瓦様のタイルは常に補修が為されるなど、建物の清潔感を維持することで、来院する患者やその家族に好感を常に持たれるように心掛けています。

COVER STORY
2023
北海道

医療法人社団凜誠会

クリニック森の風

医療ITに意欲的に取り組む有床診療所で 試行錯誤の後に辿り着いた電子カルテが、 日本最北の地の地域医療を強力に支える

宗谷海峡に臨む稚内の地で、2002年開業時より「頼れる医療機関」を目指してきた有床診療所「クリニック森の風」。都市部ならずとも最良の医療を提供すべく、最新の内視鏡、CTを始めとする機器を駆使して疾患の早期発見に努める。2012年には情報システム専従者を雇い入れ、独自の電子カルテシステムを開発するなどIT化も推進してきている。途中、紆余曲折を経て、昨年、待望の機能を搭載した中小規模医療機関向け電子カルテシステムの導入を果たした。同システムの導入に至った経緯とその有用性等について、院長の藤崎氏、システム担当の高山氏らに話を聞いた。

医療法人社団凜誠会クリニック森の風
院長

藤崎吉文氏に聞く

——クリニック森の風の沿革と概要からお聞かせください。

私は1986年に札幌医科大学を卒業以来、北海道の地で消化器内科医として研鑽を積んできましたが、その間、地域医療に対しさまざまな疑問を覚えてきていました。

そのことを踏まえ、私は何とか自分の理想の医療を実現する場を設けたいと願い、2002年8月、この稚内の地に当クリニックを開設するに至りました。目指した具体像としては、「便利な医療機関」ではなく「頼れる医療機関」です。形態としては、高度な医療水準を維持できるミニマムな規模である有床診療所としました。なお、2014年9月には、医療水準の維持と経営の安定化を図るべく法人化も果たしています。

当クリニックは、理念として「健診から看取りまで」を掲げていることから、健康診断や人間ドックを実施している他、近年患者さんやそのご家族からの「最後はできる限り在宅で」という要望に応えるために、2020年からは訪問看護部を設置して、訪問看護業務にも取り組んでいます。

私の専門領域である消化器内科では、内視鏡を用いた検査・手術を行なっていますが、内視鏡検査は年間約400件、胃がんなどの内視鏡手術は約50件を実施しています。

外来患者数は、季節によって差があるものの、1日約70名。健康診断についても週40名の受診者が訪れます。

スタッフは、医師は私1名ですが、他に看護師や診療放射線技師、臨床検査技師、事務スタッフを含め計22名という充実した人的体制を取っています。

——医療ITの活用には積極的と伺っています。

よく「患者中心の医療」と言われますが、医療を行うのは、あくまで医師が中心になります。それ故、IT技術は本来、医療者が医療行為の能率を高めるためにあるべきです。また、医療ITを導入することで医師が診療情報を得やすくなる点にも、看護師などの他の医療スタッフも同じ情報を共有することにより、医療の質の向上につながることもできます。

しかし、日本の医療ITは、医療事務を効率化するためのレセプト電算システムからスタートしたこと、電子カルテシステムは決して「医師」が効率的に仕事を進めるためのシステムとしては考えられていませんでした。

そこで、当クリニックでは2012年にシステム専従の担当者雇用し、「医師」

の仕事の効率を良くしてくれる独自の電子カルテシステム開発に3年かけて取り組んだのです。このシステムは、診療記録の参照や内視鏡の動画を添付できるなどの優れた機能を有しており、日本医師会の医事会計システム「ORCA（オルカ）」と連携可能にするなど、かなりの自信作でした。残念ながら製品化には至りませんでした。しかし、その相談に乗ってくれた日本医師会からも高く評価されました。

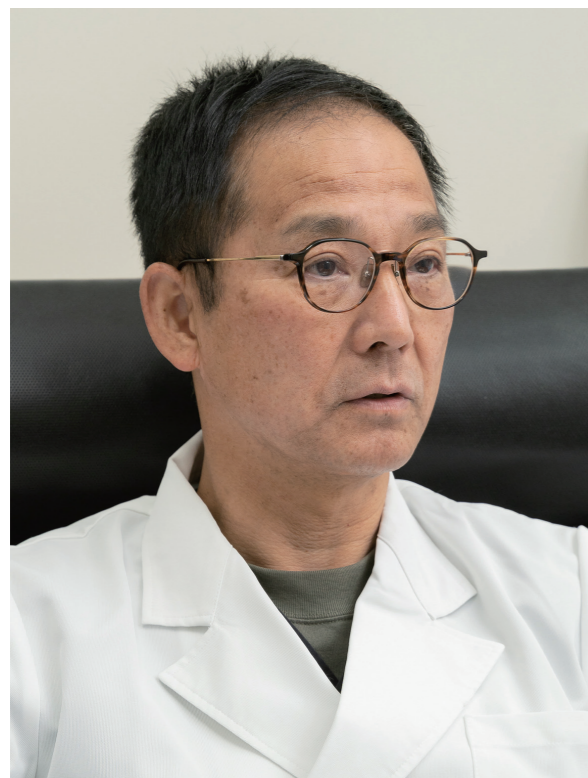
——電子カルテシステム「MALL（モール）：パシフィックメディカル」を2022年に導入した経緯をお聞かせください。

前述した独自開発の電子カルテシステム

のベースとした「Microsoft Excel」の仕様が変更された関係によりシステム更新が難しくなったことから、大手ベンダーの電子カルテを新たに導入したのです。しかし、導入したシステムは、必要な診療情報を得るのに手間と時間がかかるなど、非常に使い勝手が悪いものでした。

また、システム改善を約束してくれたものの、コロナ禍もあり、それも果たさず、私だけでなく院内スタッフからも不満の声が大きくなったのです。日本で電子カルテシステムの普及の進まない理由が、車の運転で言えば、まさに自分でブレーキとアクセルを同時に踏みながら運転させられるような、このようなシステムにあると思いませんか。

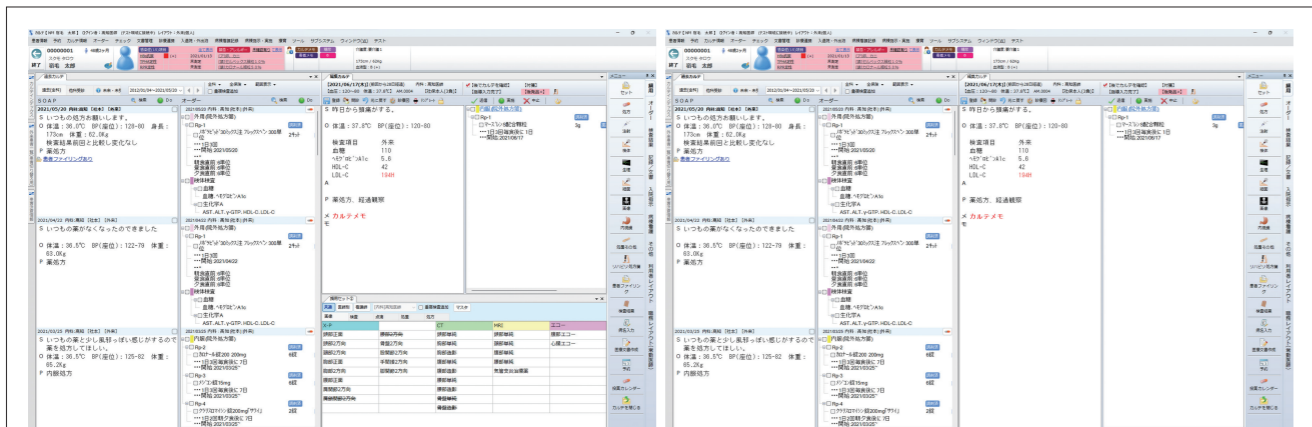
そこで、ハードウェアの保守契約が切れるのを機に、システム担当スタッフか



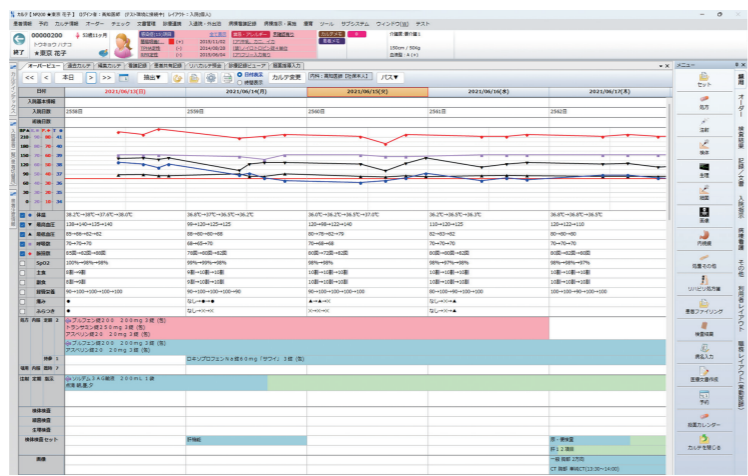
藤崎吉文（ふじさき・よしふみ）氏

1986年北海道立札幌医科大学医学部卒。同年札幌医科大学第四内科入局。美瑛市立病院、東札幌病院、国立函館病院、旭川赤十字病院、羅臼町国民健康保険病院等を経て、1996年さっぽろ香雪病院、1997年熱海ちとせ病院理事兼副院長、1998年稚内植心会病院副院長。2002年クリニック森の風開業、現在に至る。

電子カルテシステム「MALL」画面



電子カルテシステム「MALL」の外來画面。ユーザー毎に自由にレイアウトを組み替えることができ、スタッフ個々によって業務が行いやすいようなインターフェースを持つことができる。



電子カルテシステム「MALL」の入院画面。入院患者のバイタル情報や薬の処方といったデータを簡単に閲覧することができ、業務の効率化を図ることができる。



電子カルテシステムを駆使して診療を行う藤崎院長。同クリニックでは、現行「MALL」以外に、従来から運用している独自開発のシステムと更新前のシステムも同時に参照できるよう、2面モニタ（右端はPACS用モニタ）を使いながら診療を行っている。

らの進言を受け、パシフィックメディアの電子カルテシステム「MALL」を2022年5月に導入したのです。

——電子カルテシステム「MALL」への評価をお聞かせください。

これまで市販されている中小規模施設向け電子カルテシステムには、優れた機能性を有する有床診療所向けのものはありませんでした。

一方、「MALL」は、私たちが開発した独自システムと近い機能・特長を有しています。例えば、画面をスタッフに応じて多彩な設定項目を選択して自由にレイアウトできることや、施設に合わせたシステムを構成することが可能です。

入院に関する機能も他の診療所向け電

子カルテシステムに比べて充実しており、当クリニックは内視鏡手術などで入院する患者さんも少なくないのですが、同ケースにおいても全く問題なく対応可能です。また、検査機器や他社のシステムとの連携実績が豊富である点も、優れた機能であると感じています。

なお、有床診療所には、心臓専門や脳神経外科専門といった専科施設も多いのですが、そのような施設にも対応可能と推察できる「MALL」は、優れた電子カルテシステムであると感じています。

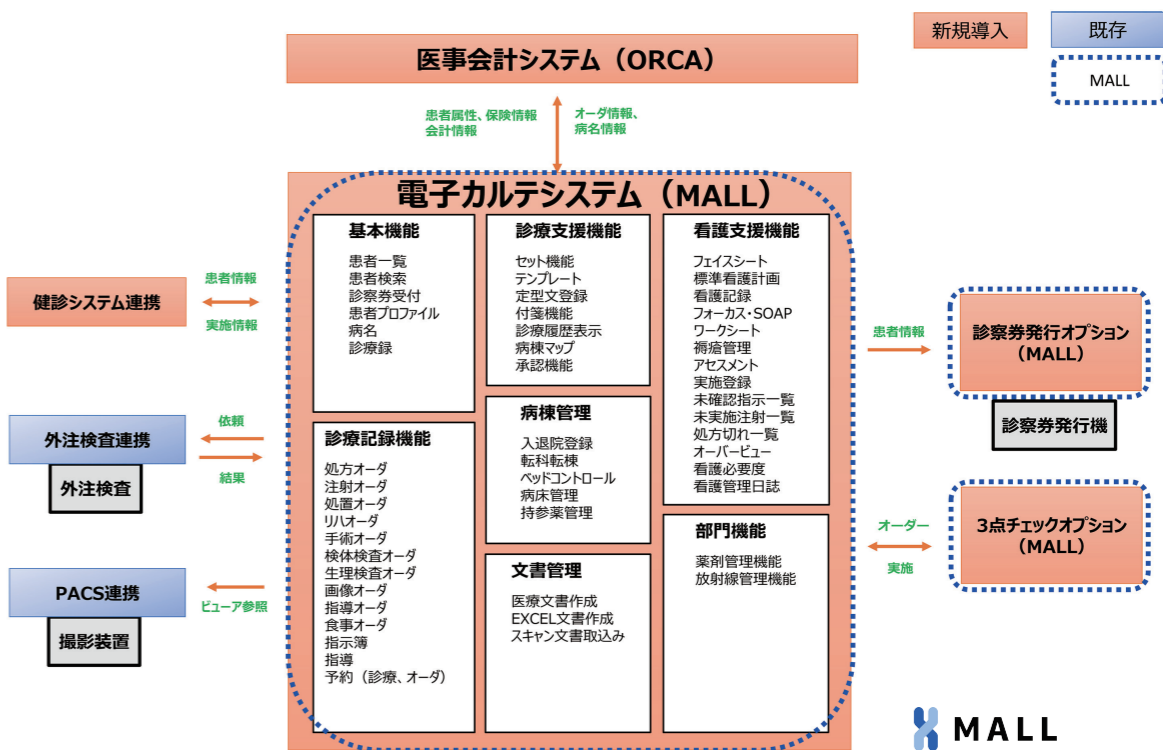
——「MALL」を含め、今後の医療ITの進化への期待をお聞かせください。

「MALL」は確かに優れたシステムですが、まだまだ伸び代があります。今後も医療現場の要望を取り入れ、より機能性の高い、使いやすいシステムになっていくて欲しいですね。

「MALL」は、年に2度、バージョンアップを行っており、その度に新機能を取り入れていくと聞いていますので、期待しています。

今後の医療を考えると、結局、患者さんは、自分を助けてくれる医療機関に集まります。その時、無床診療所ではなく、大きな総合病院でもなく、患者さん個々のニーズにきめ細かく対応することが可能である上に、質の高い医療を提供できる有床診療所が、かなり優位な位置を占めるのではないのでしょうか。そして、その有床診療所の医療ITを支える電子カルテシステムとして、「MALL」は、とても力強いインフラになると思います。

クリニック森の風 システム構成図



電子カルテシステム「MALL」を中心にPACSや医事会計システム「ORCA」、健診システム等が連携し、シームレスなデータ連携とシステム運用を実現している。

■クリニック森の風 専従のシステム担当要員を雇用して医療ITの最適化を実現 より高機能な電子カルテへの更新で業務の効率化を達成する

——Interview——

医療法人社団濃誠会クリニック森の風 システム担当 高山武志氏に聞く



「私のようなシステム専従者を置く有床診療所は稀有だと思います」と話す、システム担当の高山武志氏。

藤崎院長へのインタビューにあるとおり、クリニック森の風は、開業以来、医療ITの活用積極的に取り組み続けてきている。現在、同クリニックにおいて、医療情報システムの構築・管理・運用を担っているのが、高山武志氏である。高山氏は、2012年に同クリニックに入職したときのことをつぎのように話す。

「私は元々プログラマーなのですが、故郷である稚内という土地でシステムに関する様々な仕事に携わり地元貢献したいと常々考えていたのです。ある時、当クリニックでシステム開発に関する求人を出していたことを耳にし、医療については当時ほとんど知識がありませんでしたが、貴重な経験が積めるのではと考え、入社を決意しました」

高山氏は入社後、藤崎院長とともに「Microsoft Excel」をベースに、有床診療所の運営に必要な機能を盛り込んだ独自の電子カルテシステムを2015年に開発。医事システムについては日医のORCA（オルカ）と連携させ、総合的な病院内視鏡の動画像をカルテに添付できるなど、実用性に長けた機能を持つシステムとして運用を続けてきたが、「Excel」の仕様の関係で継続運用が困難となったことから、入院患者に対するオプション機能を搭載した大手ベンダーの診療所向け電子カルテシステムを2017年に導入した。なお、同クリニック独自のシステムは、診療録保存の観点から、参照用として現在に至るまで稼働を続けている。

■電子カルテシステム「MALL」画面の見やすさと高い操作性でクリニックスタッフの支持を得る

前述したとおり2017年に電子カルテシステムを更新したが、このシステムが同クリニックではたいへん評判が悪かったと高山氏は話す。

「当該システムは、一応、外来と入院に関する機能についてはひと通り揃ってはいたのですが、必要な診療情報を得るまでには何回もクリックしなければならぬなど、使い勝手が悪く院内スタッフから



病棟のある2Fロビー。同クリニックは外来・病棟フロアに絨毯をしきつめ、履物不要のアメニティを実現している。

の不満は少なくありませんでした。システムの改善要望は何度も当時のベンダーに提出していたのですが、ちょうど時期がコロナ禍に重なったこともあって、ほとんど改善されなかったため、次のハードウェア関連機器の更新を機に別の電子カルテシステム導入を検討することにしましたのです」

高山氏は、数年前に参加した国際モダンホスピタルシヨウに出展されていたパシフィックメディカルの電子カルテシステム「MALL」デモ機の実験から、同システムの導入を藤崎院長に推したと話す。

「デモ機を操作した印象として、カルテ画面のレイアウトの自由度が高い上に、スタッフ一人ひとりが患者の診療情報取得するためのクリック数も少なく済み、私の理想に近いレイアウトと機能を有していると感じました。それ故、何の迷いもなく、院長に『MALL』導入を進言したのです。また、その後の当クリニック

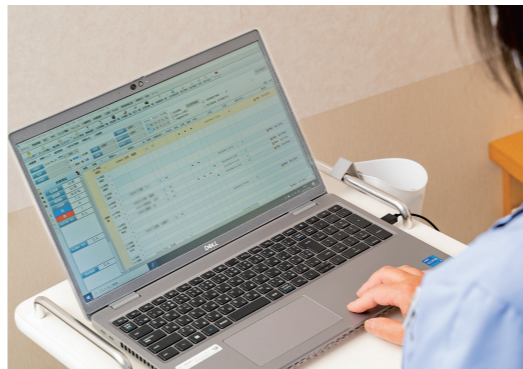
ク内でのプレゼンテーションでも高い評価を受け、導入を決定するに至りました」結果、2022年2月に電子カルテシステム「MALL」の導入を決定。ハードウェアの保守契約の関係から、同年5月初めまでにシステムを導入し、稼働開始に漕ぎ着けたと高山氏は話す。

「短期間での更新でしたので苦労しましたが、当クリニックのスタッフはITリテラシーが高い手が多い上、電子カルテ運用歴も長いことから、5月の稼働開始の頃には、問題なくシステムを運用できるようになっていました。」

もちろん、パシフィックメディカルの対応も迅速で、5月の稼働開始に間に合わせてもらったことに感謝しています」稼働開始以降、システムは順調に稼働しているという。

「システム上のトラブルはほぼ無く、システム担当としては寂しい限りですが、スタッフが安心して使える環境を提供できたことに満足しています。」

また、電子カルテシステムの機能面でも、画面上で必要な診療情報を容易に得



電子カルテシステム用の端末は病棟でノートPC 1台、デスクトップPC 3台が稼働。外来等も含めると、約20台の端末が稼働中である。

■クリニック森の風 新規導入の電子カルテにより病棟での記録・確認の効率化果たす 情報共有や業務負担の軽減のみならず医療安全にも大きく貢献

医療法人社団凜誠会クリニック森の風
看護部主任
伊藤淑美氏に聞く



「新しい電子カルテシステム『MALL』は、独自開発のシステムと似て操作しやすい」と話す看護師の伊藤淑美氏。

クリニック森の風では、1名のパート職員を含め、8名の看護師が勤務している。同クリニックの看護業務の概要を看護部主任の伊藤淑美氏は、つぎのように話す。「当クリニックの看護師は、外来・病棟・検査業務をそれぞれ毎日ローテーションしながら、担当するようにしています。」

また、当クリニックでは、内視鏡検査・治療を中心に、医療技術の向上に力を入れており、看護師も最先端技術の習得に余念がありません。ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術：Endoscopic Submucosal Dissection）導入時なども、看護師が積極的に同術式のフォローができるよう、訓練しています。

なお、コロナ禍においても、まだ基幹病院が発熱外来を行っていない頃から発熱外来を立ち上げ、PCR検査等に積極的に取り組んできました。施設の構造上、

られ、システムそのもののレスポンスも高速化されたことにより、スタッフのストレスが大幅に軽減されました。医療事務面においても、他施設に患者さんを紹介する際の紹介状等の書類作成やデータ出力が簡便になり、業務が大幅に効率化されています。

システム運用で何か困ったことや、問い合わせたいことが起きた場合も、パシフィックメディカルの担当者が迅速に対応してくれますので、電子カルテシステム運用に関して当クリニックが困ったことは今までありませんね」

情報システム担当 ソフト内製化で現場のニーズをフォロー 診療の効率化とシステムの最適化を実現

高山氏は、システム担当として電子カルテシステムのマネージメントだけでなく、院内ネットワークや独自システムの構築・運用も行っている。

「電子カルテシステムと直接連携はしていませんが、診療に有用なシステムとして内視鏡画像をPACSに取り込むシステムの構築・運用や、病棟の看護日誌に関するシステムの構築をしています。」

後者は、電子カルテシステムが持っている看護記録機能とは異なり、病棟におけるベッドの動きを管理するものです。つまり、何月何日に、どの患者さんが入院もしくは退院するのか、その予定やスケジュール管理をするもので、看護師からの評価も良好です」

有床診療所ながら、システム構築・運用の専任担当者がいることのメリットを、

不満も、『MALL』のオーバービュー画面では、一覧表で検査結果を把握できずし、薬の処方も一覧表示されるので、看護師が欲しいと思っているデータを容易に得られ、とても便利になりました。当然、それが医療安全の向上に貢献しているのは言うまでもありません。」

入院画面では、レイアウトを組み替えられ、患者さんに対するバイタル入力も容易です。また、当日行われる検査の確認等も簡単に、かつ見やすい構成に作りこむことが可能なのも歓迎すべき点です。さらに、外来画面における過去のデータについては、必要なデータだけを見られるようになっており、診療データを収集するにあたって業務の効率化に役立っています。また、システムそのもののレスポンスも速く、業務時間は短縮できているのではないのでしょうか」

電子カルテシステムの機能向上 ベンダーの技術力、対応力を高く評価 今後、より高い機能性向上を望む

伊藤氏は、新しい電子カルテシステム

高山氏はつぎのようにあげる。「当クリニックでは、私が医療現場の要望を聞き、そのニーズに合わせてプログラムを組み、システムを構築しています。既製のソフトウェアだと、どうしても医療現場のワークフローに完全にマッチさせることは難しいのですが、内製システムであればそのようなことはありませんし、システム改善・改修を容易に行うことができるというメリットもあります。」

また、最近では医療用ソフトウェアだけでなく、オンライン診療のためのネットワーク環境の整備も行っていることから、通信やネットワーク関係のベンダーとの交渉も増えていますが、ITの専門家として、当クリニックに最も適正なコストで効率の良いネットワークとシステムの構築・運用を実現できていると自負しています。正直、有床診療所のようなクリニックにITの専門家が1人いるのは稀有でしょうが、私の視座からもその価値はあると自己評価しています」

また、高山氏は電子カルテシステム「MALL」について、さらなる高機能化を望んでいると話す。「現在、当クリニックでは、健康診断に関しては、別システムで運用していますが、『MALL』のオプション機能として健康診断に関する機能を開発してもらいたいですね。」


現在は、データ連携こそできているものの、やはりシステムの親和性などを考慮すると、できるかぎり1社にシステムを収斂させていくことが、より運用の効率化につながると考えます」

「MALL」に、さらなる機能向上を期待していると言う。「当クリニックは訪問看護も実施していますが、その際の看護記録はクリニックに戻ってから入力を行っているため、現場で入力できるような機能があると一層便利になるはずですよ。」

また、当クリニックは患者さんへのアメニティを向上させるために施設内が絨毯でしきつめられているのですが、その反面、看護師がノートPC端末をカートで移動するのに少々不便なので、手軽に持ち運ぶことが可能なタブレット端末で電子カルテシステムを扱えるようになるとありがたいですね」

また、最後にパシフィックメディカルを高く評価した。「パシフィックメディカルの担当者は、看護師たちの要望にも積極的に対応していました。結構無茶な要望もあったでしょうが、インターフェースの作りこみなど、扱いやすいシステムを構築してくれたおかげで、業務効率もよくなり、とても感謝しています」

医療法人社団凜誠会
クリニック森の風



2002年、内科・消化器内科を標榜して開業した「クリニック森の風」。「森の風」という名称には、「静かな光の当たる森の中で風にあたってホッとするような安らげる空間をつくりたい」という思いが込められているという。

同クリニックでは、診療のほか、健康診断や人間ドック、訪問看護などの事業を開始しており、「健診から看取りまで生涯を通して切れ目のない医療の提供」を目標に医療を展開して、日本最北端の地域医療を支え続けている。

所在地：北海道稚内市湖見
3丁目6番32号
病床数：19床
院長：藤崎吉文